



巻頭言

ベンチャースピリッツ： 失敗を許すところとしくみ

The venture spirit: A mindset and mechanism for permitting mistakes



●
河田 聡 Satoshi KAWATA

大阪大学 教授・理化学研究所 主任研究員

科学者は未知の世界を探検し、不可能と言われてきたことに挑戦する。できることをやったり人まねをするのはまだ学生であって、科学者ではない。未知の世界を探検し不可能に挑戦をすると、必ず失敗をする。失敗をしないような安全な冒険なら、科学者がかかわらなくてもいい。科学者にこそ、ベンチャー起業家のスピリッツが求められる。少しでも失敗確率を減らすために勉強をし努力をし、調査、分析、試行実験を行うが、それでも失敗をする。二度三度失敗するどころか、最後まで失敗で終わるかもしれない。失敗を経験しなければ、科学者は成長しない。ベンチャービジネスでも、100社に1社が成功すればいいと言われる。これこそがまさに科学者に求められるスピリッツである。

ところが、最近の国の研究予算やプロジェクトでは、科学者に対して細かく中間評価や最終評価が行われて、失敗は許されない。予定どおりの進展が得られなければ、中間スクリーニングによって中止を求められる。納税者に対するアカウントビリティと言うが、ファンディングする側が科学者の失敗に対する責任を取りたくないからではないか、と勘ぐりたくなる。国や大学も、教員にやたらと中期計画だとか数値目標を求める。教育機関の国際化や社会との交流・貢献、人材育成などの普通の教育までがCOEという名の下に競争的資金化し、目標達成のための教育が行われている。このやり方は失敗率を減らすかもしれないが、弾力性がない。このままでは、むしろ本当の教育が死んでしまわないかと心配になる。

日本では、できることしかやれなくなってしまった気がする。失敗するかもしれないことは、やることすら許されない。壮大すぎるテーマは信用されず、ちまちまとしたテーマが安心される。

震災の後、政府は大胆な対策が打てず、動きが非常に遅かったと言われている。大胆な対策には、失敗が伴う。失敗をすると、マスコミや国民が批判をする。日本人はとても意気地なしになってしまった。リスクを極端に恐れる社会は、住んでいて楽しくない。日本の入試制度は満点からの減点主義であり、創造性や個性は求められない。減点主義入試では失敗しない人だけが合格をする。この入試に勝利した人たちが作る社会は、まるで大胆さがなくてわくわく感がない。ハリウッド映画ではハラハラ・ドキドキものが流行るが、日本映画はホンワカものが流行る。

日本では一度会社を倒産させれば社会の信頼を回復することは難しく、ベンチャービジネスとは言えども創業者はまず二度と立ち直れない。科学の世界でも一度過ち（ねつ造り不正）を犯した科学者は、永遠に抹殺される。罪を償っても許されない。無茶をせずに、流行のテーマに乗っかって欧米のまねをして後をついて行くのが、一番安全なる生き方となる。それでは日本の科学は進歩しないし、社会に貢献することはできなからう。グリーンもライフも結構だが、それ以外の、誰も見向きもしないテーマや決して実現しないだろうと言われる研究をそれぞれが自由にやって、それで評価される科学社会がほしい。皆が同じテーマの研究するのは、そろそろ辞めていいのではないだろうか。失敗を許すところとしくみが、科学と技術を進歩させるのだと思う。

英訳版は720ページをご参照下さい。English version, see pp 720.

© 2011 The Chemical Society of Japan